

オンライン授業について

―教員養成学部における事例の報告―

一 二〇二〇年度前期

筆者の本務校である島根大学教育学部における二〇二〇年度前期の授業開始日は、当初四月七日（火）の予定であった。しかし、三月二十七日（金）に大学から出された通知により、新型コロナウイルス感染症拡大への対応として一週間繰り下げられ、四月十四日（火）に変更された。その後、四月九日（木）に新たな通知が出され、授業開始日は連休明けの五月七日（木）に再度繰り下げられた（前後して、教職員に対して、四月二十日から五月末までの間は可能な限り在宅で勤務するようにとの指示があった）。この二度目の授業開始繰り下げの通知と同時に、前期の授業は原則すべて遠隔授業、すなわちオンラインで行うこととされた。島根大学では既に二月から学生の課外活動等が禁止されており、三月の卒業式も中止されていた。そうした新型コロナウイルス感染症拡大の影響は既にあつたものの、島根大学におけるオンライン授業への取り組みは、人口の密集する都市部の大学

と比較して、かなり遅かつたように思われる。

島根大学におけるオンライン授業の形式は、同期型の授業、またはオンデマンド型の授業、或いは両者のハイブリッドのいずれかとされ、どれを選択するかは授業担当者の判断に任された。なお、学生の卒業要件に直接関わらない場合に限って、前期開講予定の授業を不開講とすることや、後期開講に変更することも許容された。

こうして筆者も、急遽オンラインで授業を行うこととなったが、その具体的な方法についてまったく分からなかった。四月中旬以降、オンライン授業に関する研修会が全学で開催されることとなり、筆者は四月十四日の研修会に受講した。この研修会が開催された時点で、もしもすべての教員が担当するすべての授業を同期型で行った場合、大学のサーバーの能力では対応できないことが判明していた。また学生のインターネット接続環境についても、十分ではない場合が少なくないことも判明していた。このためこの研修会では、授業はできるだけオンデマンド型で実施してほしいとの要請があつた。

竹田 健二

結果的に、前期に筆者が担当した授業は、筆者が単独で担当する「漢文学基礎講義」（受講生二十五名程度。前後期反復で開講）と、五人の教員がオムニバス形式で担当する授業（「初等国語科内容構成研究」。筆者の担当は三回、受講生五十名程度。前後期反復で開講）との二つが、オンデマンド型での開講となった。筆者が単独で担当する「漢文学講義」（前期のみ開講）は後期開講に変更し、また「漢文学演習」（前後期とも開講）は前期は不開講とした。演習の授業を不開講とした理由としては、学生の大学構内や建物への立ち入り、附属図書館や資料室等の施設の利用について厳しく制限され、受講生が大学にある資料（例えば大修館書店の『大漢和辞典』等）を利用して授業の準備を行うことが不可能となったことが大きい。

オンデマンド型の授業を実際に行う上で、筆者がかなりの時間と労力をつぎ込むこととなり、その結果強くストレスを感じたのは、受講生に対するフィードバックコメントの発信である。オンライン授業を行っている間、筆者はこのフィードバックコメントに忙殺された。

授業のコンテンツ作成については、前期授業開始が五月七日となった時点で一ヶ月近く準備期間があったことから、その間に二〜三回分の授業のコンテンツを作成することができた。その後の授業分は、授業の開始後、授業の進行と並行してコンテンツを作成することで特に大きな支障はなかった。これは主に、オンデマンドで開講した授業のコンテンツ自体が、基本的に従来筆者が行ってきた授業の内容をベースにしていたためである。もちろん全く同じ内容では授業者としても面白くないため、教材の差し替え等の工夫はしたが、パワーポイントのスライド（音声無し）に、講義の内容、各回の授業の課題、課題の解説等を文章化したものを組み込む作業自体は、確かに時間と労力を要したものの、筆者にとってさほどストレスとはならなかった。筆者は、授業に用いる教科書を執筆したことは一度

もないが、コンテンツ作成の作業は、基本的に教科書の執筆と同じではないかと感じながら、この作業に取り組んだ。

一方、授業を開始した後に行ったフィードバックコメントを発信する作業、すなわち、受講生が提出したレポートのすべてに対して、一週間後の次の授業までにフィードバックコメントを必ず送り返すこと、その中で提出されたレポートの問題点を指摘し、かつ助言を与えることには、コンテンツの作成とは比較できないほど多くの時間と労力が必要であった。このため、筆者は大いに疲弊した。

次週の授業までにフィードバックコメントをすべての受講生に個別に発信することは、特に誰かから指示されたわけではなく、授業の目標・目的を達成するために不可欠であると筆者自身が判断し、自らに課したものである。もちろん、時間と労力を要するであろうことは予想していたが、実際に行うと、必要な作業量は予想以上であった。

受講生の中には、筆者が作成して送付した授業資料をしっかりと読み込みに、授業の内容も課題の意図も十分に理解し、よく考えて執筆したレポートを提出する者もいた。こうした場合のフィードバックコメントは、「よくできました」の一言で十分だが、授業資料を十分には読んでおらず、また課題の意図も十分には理解しないまま、甚だ杜撰なレポートを提出する受講生も必ずといってよいほどいた。彼らに対して、レポートの問題点を指摘し、改善を求めるコメントを返すのだが、中には杜撰なレポートを繰り返して提出する者もいた。

受講生の中には「毎回丁寧なフィードバックコメントをありがとうございます」とのメッセージを寄せてくれる者もいて、それを読むとこちらも幾分か嬉しくなったのだが、同時に、こうしたメッセージが来るということは、他の授業ではフィードバックコメントがほとんど返ってこない

いうことではないか、とも思われ、素直に喜ぶことはできなかった。

なお、筆者は本務校での授業の他に、非常勤として島根県立大学での授業（「中国古典Ⅰ（基礎）」、受講生五十名程度）も前期に担当した。授業の内容は上述の「漢文学基礎講義」とほぼ同じであるが、この授業もオンラインで実施するように指示された。形式も本務校と概ね同様のオンデマンド型である。こちらにも提出されたすべての課題にフィードバックコメントを返すことが大変であった。

二〇二〇年度後期

八月に入ってから、島根県内では大きなクラスターが一つ発生した後は、新たな感染者発生が少ない状態が続いた（本稿執筆の時点（二〇二一年五月十六日）で、島根県は感染者数全国最少を、共に人口の少ない鳥取県と争っている。十万人あたりの感染者数も全国最低水準である）。島根大学では、二〇二〇年度の後期の授業も原則としてはオンラインで実施するといったものの、対面での実施が必要とされる授業については、授業担当者が対面形式での授業の実施を部局長に申請し、認められれば対面で実施してよい、ということになった。

この結果、後期の授業には対面とオンラインとが混在することとなったわけだが、そのために、学生が大学の教室において対面の授業を受講した直後（或いは直前）、連続してオンラインの授業を受講するという、前期にはなかったケースに対応する必要が生じた。しかし、そうした学生が大学内でオンラインの授業を受講するためのスペースを確保することはできず、このため後期のオンライン授業は、すべてオンデマンド型で行うように指示された。前期に担当した授業を同期型で行っていた或る同僚は、後期に

同じ授業を反復で開講する際、新たにオンデマンド型の授業として作り直さなければならぬ、とぼやいていた。

後期からは、対面での授業が認められたことと合わせて、学生のキャンパス内や建物への立ち入り、図書館や資料室等の利用について、制限が緩和された。但し、対面の授業に使われる各教室の収容人数は、通常の半分とされた。このため、受講生の多い授業に関しては、十分な広さのある教室を確保することができず、授業担当者の判断を待つことなくオンライン（オンデマンド）で実施するように指示された。

筆者は、後期に単独で担当する授業のすべて（後期開講の「漢文学基礎講義」・「漢文学演習」・「漢字・漢文教材研究」に加えて、前期開講から後期開講へ変更した「漢文学講義」）について、対面での実施を申請し、いずれも認められた。この結果、筆者が後期にオンラインで行った授業は、前期と反復で行う「初等国語科内容構成研究」のみであった。この授業は、受講生が多いために、学部の指示によりオンラインで実施せざるを得なかった授業の一つである。

但し、一月の冬休み明けから大学入試共通テストまでの間は、全学すべての授業をオンラインで行うようにとの指示が十二月中旬にあった。このため、対面で行っていた授業もそれぞれ各一回はオンライン（オンデマンド）で実施した。この指示は、大学入学共通テストを無事に実施するため、と説明されたように思うが、冬休み期間中に感染者の多い地域に帰省した学生が、キャンパスに戻ってきて感染を広めるリスクを回避するためであったのだろう。

なお、対面で授業を行う際は、感染拡大防止策を徹底することが求められ、授業者・受講生ともマスクを着用すること、教室の換気を行うこと、受講生の座席を指定し、間隔をあけること、授業終了後には、使用した机

等をアルコールで消毒する作業を行うことが指示された。また、教室は基本的に施錠され、授業の前に授業者が事務室に行き、教室の鍵を借り受けて解錠し、そして授業後は施錠して鍵を事務室に返却しなければならなくなった。いずれも通常は不要のことで甚だ煩瑣であったが、筆者にすれば、フィードバックコメントの発信に較べればどうということではなかった。

もともと、筆者の同僚の中には、対面の授業にそれほど積極的ではない教員がいたようである。筆者の申請した対面での授業実施がすべて認められ、教室を確保することができたのも、おそらくそのためであったと思われる。どうして対面に積極的ではなかったのか、感染リスクを避けようとしたからなのか、何か別に事情があったからか、「オンライン授業の方が楽」と思ったからなのかは分からない。

三 オンライン授業の評価

以上述べた通り、筆者のオンライン授業の経験は甚だ限定的なものであるが、オンライン授業に取り組む中で筆者が悩み、今もどうすればよかったのか分からないことがある。それは、オンラインの授業において、授業の目標が達成されたかどうかの「評価」を、どのように行えばよいのか、という点である。

およそ授業というものには、それぞれの教育課程における授業の目標があり、通常はその目標を達成するために適切な方法が選ばれ（講義形式、演習形式など）、そして授業の結果として目標が達成されたかどうか適切に評価されなければならない、と筆者は考える。かつて筆者が学生であった頃は、かなりの部分が授業担当者の裁量に委ねられていたものと思われる。しかし今日では、授業の目標や方法、評価の方法などはいずれも授業

担当者がシラバスに記述し、受講者に明示しなければならない。そのシラバスに記載された授業の目標・授業の方法・評価の方法は、当然連動し、整合していなければならない（はずである）。

今回、新型コロナウイルス感染症拡大への対応という必要から、授業の方法がオンライン授業という極めて限定的な方法しか許されなくなった。そのこと自体は、やむを得ないことであつたと筆者も考える。しかし、オンライン授業に関して、全学の教務関係の担当者、或いは学部長や学部の教務関係の担当者等から授業担当者に出される指示は、授業の方法をオンラインの方式とすることのみに終始していたように思う。筆者が受けた全学の講習会も結局そうで、授業の評価に関する言及は、筆者の記憶する限り、講習内容としてはほとんどなかった。

もともと、評価に関するものが一つもなかったということではない。例えば、二〇二〇年三月二十四日付で文科省高等教育局長から出された「令和二年度における大学等の授業の開始等について（通知）」のように、「面接授業に代えて遠隔授業を行う場合にも、大学は当該授業科目を履修した学生に対しては試験の上単位を与えることになるが、その方法は、一斉に実施する定期試験等に限られるのではなく、レポートの活用による学習評価等、到達目標に応じた適切な成績評価手法を選択することができると。」といった通知はあつた。しかし、これは実質的に、オンライン授業の評価の方法を授業担当者に「丸投げ」したものでしかない。「適切な成績評価手法」とは具体的にどのようなものか、その「一斉に実施する定期試験」にかわる代替の「手法」が、評価の方法として十分に確実で「適切」であるかどうか、どうやって判断すればよいのか、筆者には分からない。

もとより、授業の方法がオンラインになったからといって、授業の目標そのものを変更することは、教育課程全体に大きな影響を生じることとな

り、現実的ではない。特に筆者の勤務する教員養成学部の場合、その教育課程は学生の学校教育職員免許状（教員免許）の取得と直接関わり、極めて煩瑣な法的規制が存在する。授業の方法が変わったからといって、目標や目的を簡単に変更するわけにはいかない。

筆者が前期にオンライン（オンデマンド）で実施した「漢文学基礎講義」は、受講生が中学校・高等学校の国語科で漢文を指導できるようにすることを目標とする授業である。これは、現行の所謂教員免許法では、漢文学の授業は最低一単位あれば中高の国語の免許が取得できるためである。このため、この授業の具体的な目的を、「基本的な漢文を、漢和字典を活用しつつ自力で訓読することができるようになる」ことに設定している。そして授業の目標・目的を達成したかどうかを判断するための評価の方法としては、従来は期末試験、つまり「一斉に実施する定期試験」という方法のみで行ってきた（期末試験の際には、漢和字典・授業資料等の持ち込み可。インターネット等通信を利用することは不可）。

前期のオンライン授業では、受講生を教室に集め、対面の形で試験を「一斉に実施する」ことが認められなかった。このため、「漢文学基礎講義」の授業の目標・目的が達成できたかどうかをどのようにして評価すればいいのか、筆者は悩んだが、最終的には従来の期末試験の形態に近づけた「テスト」を、オンラインで実施することとした。つまり、試験開始時間を設定し、その時間に受講生にオンラインで課題を提示し、課題の提示後五分以内に解答をオンラインで提出させる。これを連続して二回繰り返し（課題は別のものを出す）こととしたのである。こうした形での評価が「適切」なのか、公平性を保つことができたのか、筆者にはよく分からない。

筆者の行ったようなオンラインでの「テスト」では、所謂不正行為を防ぐことはできないであろうと予想される。筆者も、インターネットを検索

しても簡単には答えが見つからないような漢文を出題する、といった対策を検討してみたが、授業の内容や目的との整合性、問題の分量や解答時間等を勘案し、結局は特殊な漢文を出題することはしなかった。なお、受講者の成績は、この変則的な期末試験の点数と、毎回の授業で提出されたレポートを点数化したものとを合算した。

筆者はできれば二度とオンライン授業には関わりたくない。しかし、今後も感染症の拡大するならば、再びオンライン授業を行わなければならないかもしれない。また、所謂大学改革の進行によっては、好むと好まざるにかかわらず、オンライン授業は今後普及するかもしれない。覚悟はしておかねばならないと思っている。

竹田 健二（たけだ・けんじ）

一九六二年生まれ。島根大学学術研究院教育学系教授。専門は中国古代思想史、近代日本漢学。著書に『先秦思想與出土文獻研究』（台湾・花木蘭文化出版社、二〇一四年九月）、編著に『懷徳堂研究第二集』（汲古書院、二〇一八年十一月）、主要論文に「戦国時代の氣概念―以出土文獻为中心―」（台湾・政治大学『東亞觀念史集刊』第十一期、二〇一六年十二月）など。